

全校避難訓練校長挨拶（2023.6.14）

本日は雨天のため、全校避難訓練のうち、各教室から上グラウンドへの避難訓練は中止となりました。このあと、各教室でグループ別会合を行います、その前に私から一言お話をします。

日本は、その地理的条件から災害の多い国です。川の氾濫、津波の襲来、火山の爆発、大地震、台風の上陸と、歴史を見ても定期的に日本列島に困難が襲ってきました。

大きな災害が起こるたびに、人々は危機意識を持ち、備えを行います、やがて危機意識も薄れがちになります。

「天災は忘れたころにやってくる」

この有名な言葉は誰の言葉でしょうか。これは明治末期から大正・昭和初期にかけて、物理学者あるいは随筆家として活躍した寺田寅彦の言葉とされています。1923年、当時の東京を壊滅させた関東大震災を背景にした言葉です。

そして2011年3月11日。東日本大震災が起きました。もう12年前になります。中学生の中には記憶にない人も多いのではないかと思います。地震のあとに発生した津波などで2万人を超える死者と行方不明者が発生。そして福島原子力発電所も爆発するという、前代未聞、想定外の出来事が起きました。

東京でも帰宅できない人や徒歩で帰宅する人で溢れました。

ここ武蔵はちょうど学年末の定期試験が終わった後で、学校には部活動などで130数名がいたそうです。東京は電車がとまり、また家庭とも連絡がなかなかつかずに大混乱をしました。このうち78名が学校に宿泊。また先生方も30数名が学校に宿泊し対応に努めたと聞いています。そうしたときの経験も踏まえ、防災マニュアルが作成されています。

私は当時埼玉県のある学校の校長をしていましたが、あの日のことはよく覚えています。本当に大変でした。その後、被災地の東北に何度かボランティアに行き、現地の方のお話を聞いてなるほどと思ったことが一つあります。

それは、あの地震や津波で生死を分けたのは「頭で考えるか心で感じるか」ということです。頭で考えて「大丈夫だろう」と思った人は、逃げ遅れた方も多く津波にのまれてし

まった。心で感じて直観的に「危ない」と感じた人は助かった。

「釜石の奇跡」という言葉がありますが、岩手県釜石市では地元の中学生は「津波が来たら、高台に逃げろ」という言い伝えにしたがって率先して行動し、多くの命が救われました。

一方、残念ながら、宮城県の大川小学校では、先生の指示にしたがって、避難所にも指定されていた学校に留まって、子供たちは先生とともに流されていきました。残念なことです。先生のいうことは絶対ではなかったということです。

私たちも、地震に向けて最善の準備をします。したがって、避難訓練など、防災に備えた訓練は真剣に実施し、準備をしてほしいと思います。一方で、学校も絶対ではない。まず何よりも、絶対に生きよう、生きのびるという意志、最後は自分で自分の命を守るという「自助」の精神を覚えておいてください。

そしてもう一つ大事なのが、仲間との助け合い、「共助」の精神です。釜石の事例でも、中学生たちが小学生に呼び掛けてみんなが助かったと言われています。

特に、武蔵のように、広範囲から生徒が集まってくる学校では、上級生・下級生、どういいう仲間がいるかということを知り合うことが、地震への備えに限らず、極めて重要だと思います。

これから始まるグループ別会合の時間を利用して、きたるべき危機のときにみんなで支えあえるように、お互いよく知り合いになってほしいと思います。

先生方のお話も聞きつつ、上級生はどうぞリーダーシップを発揮して、仲間の絆を深めておいてください。

それでは、先生の指示にしたがって、グループ別会合を始めてください。以上で私の話を終わります。